

何をやらせても何もできない少年を笑ってばっかりな少女の本心はきつとそこにあつたはず。笑えばいいと何度も心に届くのかもわからないと世界に問うている自分だけのことを知っているのだから今でも笑っているのは気のせいではない。だからあのとき、教えてくれたあの人に眩いている少年を信じているのはどうしてだろうと自分に空を見上げるほどの力がないと思つたのはどうしてだろうと考え込んでしまったのはいずれにしろ、と眩き、世界は私を見下ろしているほどの偉い者なのかと哲学者のような考え方が年相応ではないと、そのことに気が付き、フツと森をじつと見つめていた。何を望んでいるのかわからないけれど、それでも私は少しでも多くのことを体験していく。自ずとそのことに気が付いたのが今でも思い出せ、森の中にいる自分がどうしてこんなにも笑えるのだろうか。

私は星が輝く空に想いを残すのが好きだから、いつもこの空に想いを載せる。きつと私のことを信じていてくれるあの少年が私のことをまた探している。きつとそのことが好きだからなのかもしれないけど。

「ねえ。教えてよ。あなたの名前を聞いてないのに」

夜空に映る月に私はどうしてかお願い事をしていた。晴れた天気美しく輝く、世界に一つの想いを残したから。

いずれ知るであろう、そのことを私はとつに思い起こした。

「名前を教えてよと呟く少女」

最近になって綺麗事をたくさん知っているのが自分の理想を高めることにつながっていくのが当たり前なんだと思っていたけど、それは勘違いなんだと気づいた。自分の世界の中で知っていることを答えるに求めているのが何をしたいのかをまたしても考えてしまうのだから。何もできない自分がそこにはいて、私は信じているのが知っていたのは何を教えてくれるのかわからない。

ずっとここにもいても仕方ないが私はあの少年のような生き方をすればいいのではないのかと思っているのだが、それにしても好きだったことを伝えたい気持ち今は今でもあるのだ。きつとあの人のようにと少年は呟いていたけど、それでも少しでも近づきたくて、そつとコップの中に綺麗な雨餅を捧げて一筋の光を一瞬感じた。綺麗な瞳の中に綺麗な考えがあるとあの人は言っていたのだ。

私は何をすればいいのかなと外を部屋から見上げれば綺麗な夜空が輝いていた。見ているだけでも美しいのに、それでも公園に行ってみたいと思うのはどうしてだろう。そんな気持ちになるのなら少しでも少年の傍に居たいと思うのは別段不思議な話ではない。だって相思相愛の関係を知っているのはお互いしか知らないから。当たり前だけど、恋愛って大変ってこんなまだ学校に行っている歳だから、まだ少年のことがわからない。きつとこれからもわからないの

かもしれないけど。

夜空の光に月光が輝いている。綺麗な瞳に映りこむのは一人の少年と私が涙を拭いて公園に今から行ってみようと思う。公園にならもしかしたら、誰もいないかもしれないから、自分の言葉を刻んだ石もあるかもしれないから。

「行ってみよう」

私は少し前まで楽しい想いをしていたから、ちよつとでもその二つのベンチに二つの相思相愛が見えるのかもしれない。

支度をして外に出掛けた。

望むは 希望

信賴するは 愛した相手

人の世 理の欠片

一つでも失えば

人は 悲哀を知る

人は何を求めて、この先のことを考えているのかがわからず、人のことよりも自身のことをいつも気にしているのだからと、人は嘆く。時々何をしてこれからを過ごすのかを考えたら私

は夜空を見上げていく。彼の地にて恐ろしい生き物が存在しているのだと聞いたとき私の心踊る。それは人の記憶を想いを残していずれにしろと、呟く少年の声がどこで聞こえたのか。森の中で一人、ひっそりとした世界の中。私の心を信じているのはたった一つのカタチを残していくなんてどうにもなれないと知っていたのはわからないと、どこにでもいる少年と私が知っている少年を区別するだけでも世界は壊れない。きっとどこにでも転がっている一つの欠片を楽しく思い出して、いずれにしろと呟くのは至って不思議なことではないのだと、私のことを信じていてるのはどうして、と。

木の葉を踏んでいけば静かな夜の森は深々とした冠絶された言葉をどこにでもあるのだからそれが体となってカタチとなるのは最早、ここでは人の記憶と森の記録がお互いに干渉しているのが当たり前。

夜空の綺麗さに月の光に私はめくらまいを起こす。星屑たちの光は何も見えない自分が人の記録を覚えてくれるのだろうか。

そしてどこに少年がいるのかはまだわからないのが本音だと、いつの間にか自分だけの世界の中でひきこもっているのだろうか。少年を探しに行つてまだ見つからない。どこでそれが見つかるのかもわからないど……、それ。

私は森林の中にある湖が月光を反射している幻想的な景色に一人一目惚れて心が洗われていく。失ってしまった記憶をどこで教えてくれたのかがわからないけど、それでもあの人の下に

行くのだと。少年が大きくなっているのかもしれない。

どうしてか湖の前で私は眩き、綺麗な言葉を何も浮かびはしない。そんな状態で次第に心が信じている結果を教えてくれと、記録に干渉しようとしていた。ここで少年と出会ったのだと、教えてくれたのが、今の私には喜びを感じさせてもらった。

一人、今はここで思い出と一緒に、少年を忘れて昔一緒に行動してくれていたあの人のことを思い出そう。

どこにでもいる

どこにだっていた

ただそのことを

失念していたのは

どうしてだろう

一人で過ごしている毎日の中で楽しいことがどこで見つかったのかはわからないけど、何をすればいいのかもわからず。そして笑顔を称えて私はとんでもなく鏡に見せる。綺麗な顔だった。私は自分のことをそう、称することが驚いてしまった。笑顔だけで私はこれから旅に出ると思ってしまう。綺麗な瞳に、紅い傷。瞳に映るはいつもの日々。楽しかったのはあのことと

あの少年の目の前で笑ったこと。とっても楽しかったひとときは今でも忘れ去られていない思  
い出。夜空に映るのは私がここから消えていったことを思い出している下校だけ。怪しげな自  
分の世界をずっと創っているのが楽しくて、何もできないでいた私を恨んでいる人がいるのだ  
ろうか。あの時以来に私は呟いているから傍にいてほしいなんて思っ、少年のことが頭をよ  
ぎる。いつものように楽しんでるのは少年とぽつかりと浮かぶ月に写された一人の影。

私に投影されたように傍にいる人をどこで見つけたのかをわからずに何をしてもわからない  
から私はすぐにとりかかるけど、人のことを馬鹿にしている自分を止めさせないといけない。  
私が私でいられるのなら、どこにでもいる、そんな人を私は探さないといけない。綺麗事だと  
誰もが思っている。だけど、それを追いかけるのが当たり前なのに。人は嫌う。人は嫌がる。  
嫌悪感を抱く。そして人はグループに分かれていく。私は一人、ふつと笑う。

なんだ、私は一人なんだ。

そう思ってしまった。

私は電燈の光を落とし、部屋を暗くして綺麗な夜空の明かりだけを部屋の中に招き入れてそ  
のままベッドの上で横になる。眠気はやってこないが、それでも目をつぶる。様々な情景が頭  
の中に、瞳の目の前に現れて私は一人で涙を流した。

光の見える先に

一つの希望を添えて

そして

いつまでも

前を向いていてよ

いつもの毎日が続いていく。綺麗な空を見つめっていると、どこかすつきりとした気分になっているのは気のせいなんかではなかった。私は私の心に素直になりたくて、いつものように洗濯、炊事、掃除をして、外に出る。

外出用の服に身を通して綺麗な心のまま前を向いて歩いていく。傍に一人の少年を傍らに。

私は誰？　と思いながらだけど、知り合いだから何も言わずに街路を通っていく。周りに笑顔を振り回しているピエロさんの姿。綺麗な服を着ているのは私だけなのかしらと、周りを見渡すと、着飾っている人が少ない。

「世知辛いね」

少年は呟くが、私は何も言わないで、そのまま歩いていく。看板が壊れている店の前でお祈りをしてあげてもいいのだけれど、それでも私は目的地にまっすぐ進んでいく。空からの陽射しはそろそろ、明るさに代わっている私の感情。綺麗なまでに輝いている宝石が目の前に転んでいる。私は何だろうと見ていると、そこには陽射しに輝いている、石があった。

私は少年に任せ、そのままその石を見続ける。その輝きに覚えがあったのだ。それは記録的にされたある有名人が持っているオーラに身を纏っていた空気の感覚と似ていた。

私の心が少しずつ跳ね上がっていく。気持ちは上々。私の覚えていることが全てにつながる。記録の全てがつながったのだ。

「私の、気持ち。これがあの人の心なのかな」

私は笑った。そして空を見上げれば鳥が飛んでいる。綺麗な空を滑空する鳥たちが太陽に翳される。

もう昼だ。

私は鳴いているお腹に、少年が笑う。

「そんなに何を見ていたの」

少年が戻っていることに気づき、さらに恥を搔いたから頬を赤らめて、ふんと顔を振って、そのまま目的地まで歩いていった。

心にうずくまっている

そのことが私を誘っているけれど

そして 私は

わたしは



いなくなってしまうのかな

とつくにお昼の時間が過ぎたときを思い出していると私はいつの間にか少年を見失ってしまっていた。私だけでも良かったのにと今ではわかる。だけど綺麗な時間が時を減っていくのが私を次々不安要素を作りだすのだから不思議でしょうがない。私は私だけのことをしていられるのが当たり前となっているのが今の自分なのだから。私のことを笑っているのが少しでもおかしいと思うのならこれからは何をすればいいのだろう。

レストランの中でフォークで突き刺して皿がカランと鳴る。綺麗な食器に傷を作ったが店員は見えないだろうから口を抑えて笑う。

いい気味だ。

ここには何も無いのだと言葉で試されたときは何をしているのかがわからずに、これからのことを考える。少年がなぜ、私の元から立ち去らないのかが気になるのだ。

「どうしたの」

「いんや、何も」

少年がそろそろとも言いそうなことを言いたそうにしていた。私は感づいたが何も気にせず笑顔を作る。そして店員さんがこちらへとやってくる。

「お客様。そろそろお時間です。お帰りになられてください」

「はいはい。美味しかったから」

まことですか。

店員さんがそう営業用スマイルを表情に出して食器を持つていく。私は舌打ちこそしないが、ここの店には何もないことに気づく。そして嫌なことを思い出してしまうことにも気づく。

少年が先に店から出ていく。面白いことを楽しんでいるような気がしてならない。うらやましい。私はどこかそんなことを想ってしまう。綺麗なことを考えているのが馬鹿らしくなつてきて、盗んだフォークをここの看板に傷つけてしまうのが昔、子供の頃にそんなことをやっていたのだから。

そのまま道を城下街へと向けていく。綺麗な星空が見える頃になつていることに気づき、私は最低なことを考えていたと思い、そして綺麗な手に汚されたことを思い出し、そして城下街に行燈が並び立っているのが私の気持ちにいつしか樂を教えてくれた。そのまま少年が迷子になつていることにも気づきながら、私は一つの心を探し求めているようなそんな気がしたのだ。綺麗な光の中で闇の中を照らすかのように心にそんな光を突き刺させたい、そんな気持ちを暗礁してしまつたのかが気になつて仕方ない。まるで灯籠を持つて歩いていくかのように。

いつの日にか

思い出すは 夏の日

鮮やかに輝く思い出たちは  
笑顔を見せて  
何度も自由を求めた